

魔法少女

ハルカ



上田ながの

表紙イラスト
ごくげつ桃

試し読み版

**当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔法少女リリカ』に基づいて作成しております。**

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



魔法少女
いなか

上田ながの
表紙イラスト/ごくげつ桃

登場人物紹介

Characters

ひつがや

日番谷ルリカ

代々悪魔の種と戦ってきた魔法少女の家系の娘。悪魔の種との戦いで母親を亡くし、魔法少女としての自信と勇気を失ってしまった。

みねふじえれな

峰藤恵令奈

物心つく前から付き合いの続くルリカの親友。姉御肌で、ルリカの事を何かと気にかけてくれるかけがえのない存在。

にしなようこ

仁科陽子

いつも優しく、生徒達に親身になってあたってくれるルリカのクラス担任。

悪魔の種というものがこの世には存在している。

人々の心から溢れ出した欲望の思念が、一つに凝り固まって生まれ出るものだ。生まれでた悪魔の種は人に取り憑く。人の心の奥深くにまで根を張り、人の持つ欲望を無尽蔵なまでに増幅させるのだ。

そして、欲望を肥大化させられた人間は、人ではなくなる。

大きすぎる思念によって人間の身体を維持できなくなり。怪物——シードと呼称される人とは似ても似つかない生物へと変質させられてしまうのだ。

シードは女を襲う。

女の子宮に卵を産み付ける為に、女を犯すのだ。

産み付けられた卵は女の持つ生命力を吸収し、孵化する。孵化した卵から生まれ出るもの——男を殺し、女を犯し、町を破壊する者。最悪の災厄……それが悪魔だ。

悪魔の力は強大であり、一匹存在しているだけで国一つが滅んだ事例さえ存在している。

『だからこそ……悪魔の種を放っておくことはできないの。シードが卵を生み出す前に、滅ぼさなければならぬ。私達魔法少女はその為にいるの。分かるわねルリカ？』

『うん』

日番谷ルリカは母によって、ことあるごとに悪魔の種の恐ろしさを幼い頃から聞かされ

ていた。そして、悪魔の種を浄化する為の術を、母によって伝えられていた。

ルリカが生まれた日番谷家は代々魔法少女の家系であり、何百年も昔から悪魔の種と戦い続けてきたのである。

ルリカはそんな自分の家のことを誇りに思っていた。

この世界を私達が守っている——そう考えるだけで、自信が漲ってくるのを感じた。自分は近い将来魔法少女になる。

そして母と共に自分が住む街を、大切な人々を守るのだ！

疑うことなくそう思っていた。

だが——。

（魔法少女にはなりたくない……。私には魔法少女なんて絶対に無理……。怖い……。怖い……。）

一年前、母が他界して以来、ルリカは自信を完全に喪失してしまっていた。母の死因。それは悪魔との戦いによるものだった。

別の街の魔法少女のミスにより生まれ出ってしまった悪魔と戦った母。

母の活躍のお陰で悪魔を滅ぼすことはできたが——母自身も命を落とした。対面した母の遺体の有様を、ルリカはいまでも忘れることができずにいる。

胸にぽっかりと巨大な穴を開けられた母の姿……。


思い出すだけで胸が激しく痛んだ。

絶対正義。

絶対に敗れるはずのない最強の魔法少女——そう思っていたのに、母は死んだ。

母でさえも命を落とした魔法少女。では母よりも未熟な自分などが変身したら、一体どんな目に遭わされてしまうのだろうか？

いつも颯爽としていた母とは違い、自分はただのちんちくりんだ。

肩の辺りで切り揃えた野暮つたいおかつば頭に、一五〇センチにも満たない低身長。胸はツルペタ、腰には括れがない寸胴——ザ・幼児体型としかいえない身体付き。その上、顔立ちだつて目がクリクリしていて、ほっぺがプクツと膨らんでいるお陰で、の様にか見えな。ロリカなんてありがたくない渾名を友人達からもらつてしまう程だ。

当然幼い見た目に比例する様に、運動神経もゼロだった。なにもないところで転ぶなんていう、どこかのあざといアイドル並みのスキルだつて持っている。

そんな自分が母でさえも命を落とした戦いに臨むことができるのか？
できるはずがない。

（ごめんねママ……。弱い子でごめんね）

そしてルリカは魔法少女としての将来を捨てた。

はずだったのに……。

「あ……ああ……あああ……」

呆然としながらルリカは放課後の学校中庭に立ち竦む。

目の前には一匹の化け物——巨大な木を思わせる形態をしたシードがいた。

（どうして？　なんでこんなことに？）

ただちよつと下校前に所属している園芸部が中庭で育てている花の様子を見ていこうと寄っただけなのに……。

まさかこの場にいた先生が悪魔の種に取り憑かれていたなんて……。

「ふしゆるるるる」

不気味な息のようなものを漏らしながら、シードはねつとりとした触手を何本もくねらせる。

異様な臭気が鼻を突いた。

シード特有の香りだ。

この匂いを嗅いでいるだけで、どうしても思い出してしまう。母の亡骸を……。

膝が笑うように震えた。カチカチと歯を鳴らしてしまう。身動き一つ取ることができぬまま、ルリカはこの場に硬直した。

(私……犯されちゃうの？ 卵を産み付けられちゃうの？)

シードに襲われたものがどうなるのか？ 何度も母に聞かされてきた話を思い出してしまおう。

(ママ……助けてママ……)

心の中で母に助けを求める。

だが、母はいない。もうどこにもいないのだ。

「ふしゅあああああ！」

シードの触手が伸びる。幾本もの肉紐が、ルリカの手足を搦め捕ろうとした。

(駄目っ!!)

絶望を悟る。

ギユウツとルリカは強く瞳を閉じた。

「ルリカああああっ!!」

刹那、ドンツとルリカの身体は弾き飛ばされ、地面を転がる。

倒れた拍子に手足がすり切れ、痛みが走った。思わず眉間に皺を寄せつつも、一体何が起きたのかと瞳を開ける。

そして――。

「嘘……どうして？」

自分の身代わりになるように、シードの触手によって身体を搦め捕られた女生徒の姿をルリカは見た。

僅かに赤みがかかった髪を背中の中程まで伸ばした、褐色肌の女子。全身を触手で締め上げられている。モデルのようにスラリとした体型に、肉紐が痛々しい程に食い込んでいた。制服に触手の体液が染み込んでいるのが見える。肉の塊が太股の上を這い回る様が、異様なまでに艶めかしく見えた。

「恵令奈ちゃん……。なんで？」

シードに囚われた女子の名をルリカは呼ぶ。

彼女のことはよく知っていた。いや、知っているなんてものじゃない。

女生徒——峰藤恵令奈は物心つく前からの親友であり、ある意味家族のような存在である幼馴染みだった。

何故恵令奈がここにいるのか？ どうして自分の身代わりになっているのか？ まるで理解できない。

夢でも見ているのではないだろうかとさえ思った。

「うつく……。ルリカ……。逃げて……。うう……。あつく……。早く逃げて！」

しかし、これは現実だ。夢じゃない。現実——現実なのだ。

恵令奈は触手から逃れようとものがきつつ、逃げろと強く伝えてくる。自分のことよりも、

ルリカのことを心配して——。

「逃げてって……。そんな……。恵令奈ちゃんを置いてなんて行けないよ！」

「だ……。大丈夫……。うつく……。この化け物……。なんだかよく分からないけど、あたしは大丈夫だか……。ら……。ん……。ん……。くふう……。だから、ルリカ行つて！ 行つて……。助けを呼んできて！ あたしは大丈夫だからさ」

幼馴染みではあるけれど、恵令奈は魔法少女とか悪魔の種のこととは何も知らない。だから本当はワケが分からず怖くて恐ろしいはずなのに、心配かけまいとしているのか微塵もそんな様子を見せようとはしない。それどころか、恵令奈は口元に引き攣り気味ではあるものの笑みさえ浮かべて見せてくる。

口元に浮かぶ微笑み——これを見た瞬間、ルリカは一年前母を失った後のことを思い出した。

『ママがいない……。私……。これからどうすればいいんだろう？』

『どうすればって……。大丈夫だよルリカ。ルリカにはおじさんがいるだろ？ それにあたしだっている』

『恵令奈ちゃん……。』

『あたしがさ……。ずっと一緒にいてやるから。ルリカが寂しくないようにずっと。ずっと一緒だ。あたしが守ってやる。何があってもルリカを。ずっとな♪』

あの時恵令奈が向けてくれた笑顔は、多分一生忘れることができなと思う。あの瞬間、自分は一人になったわけじゃないんだと悟ることができた。父や恵令奈がいる。だから母がいなくても耐えられる——そう思うことができたのだ。

「早く……ルリカ……逃げて……」

あの時の約束を恵令奈は守ろうとしてくれている。

怖いはずなのに、自分の為に——。

(できない。恵令奈ちゃんを置いてなんて行けないよ)

ここで恵令奈を置いて逃げれば、多分もう二度と会うことはできないだろう。母だけでなく親友まで失うことになる。

(そんなの耐えられない。絶対に——)

だから、ルリカは拳を握る。全身を恐怖で小刻みに震わせながら、クリツとした瞳を細め、シードを睨んだ。

「る——ルリカ？ 何を……何をしてるのよ！ 早く……早く逃げなさい!!」

何か決意を固めたことを悟ったのか、焦りの声を恵令奈が漏らした。

「大丈夫……。恵令奈ちゃんは私が守る。絶対に」

恵令奈が自分にそうしてくれたように微笑みを浮かべると共に、ルリカは右腕を空に向かって突き上げ、大きく息を吸うと共に瞳を閉じ、意識を集中させた。

(ママ——私に力を貸して……)

亡き母に願うと共に——。

「マジカルチェンジ——魔法少女!!」

己の内側に眠る魔法力を解放する。

カアアアア!!

ルリカの全身を強烈な閃光が包み込み——。

「いま……万感の思いを込めて……魔法少女ルリカ——ここに燦然」

魔法少女が降臨した。

身体を包み込むのは金色のドレス。

全細胞が解放された魔法力によって活性化した影響か、ツルペタだった胸は掌では掴みきれないほどに大きなものに変わっていた。谷間がたゆんつと揺れる。

腰はキュッと括れ、スラリとした脚がスカートから伸びる。身長は頭一つ分ほど高くなっていた。

顔立ちも大人びたものに変わる。クリツとした瞳は切れ長に、プクツと膨らんでいた頬も鋭利な曲線を描くものとなっていた。

髪の色も黒から金へと変化する。長く艶やかな金髪は腰まで届くほどに長い。風に舞い、キラキラと美しい輝きを周囲に放つ。

「な……嘘？ ルリカ？ ルリカなの？」

触手に拘束されているという状況も忘れたかのように、呆然とした表情を恵令奈は浮かべる。

「うん……。すぐ……。助けるからね恵令奈ちゃん!!」

絶対に救う。

確かにシードは怖い。母の最後を思い出すと身が竦む。

（それでも……。私しか……。私しか恵令奈ちゃんを助けることはできないんだ！ だから……。私は戦う!!）

両拳を握り締め、魔力を集中させる。

「ふしやあああああ!」

瞬間、ルリカが自分を攻撃しようとしていることを悟ったのか、幾本もの触手をシードが伸ばしてきた。

（——見えるっ!!）

それら触手の動きを魔力で強化されたルリカの瞳は完璧に捕らえる。同時に地面を蹴つて、触手の合間を縫うような動きで敵に最接近した。

「はあああああっ!」

右手に宿らせた魔力を爆発させる。

ヒュバツ！

鋭い手刀が恵令奈を捕らえる触手を斬り裂く。

「しゅあああああつ！」

緑色の血液を噴出させながら、肉片が千切れ飛んだ。シードから悲鳴のような呻き声が漏れる。

「まだまだっ！」

もちろんこれで終わりではない。更に、二撃、三撃とルリカは手刀を振るった。

シュバツ！ ドジュウツ！ シュバアアツ！！

触手を斬り裂き、シード本体にもダメージを与える。飛び散る返り血で身体が汚される。正直不快で気持ちが悪かった。それでもルリカは手を止めない。

（守る！ 私が——私が恵令奈ちゃんを守るんだ！！）

「はああああああ！」

想いのままに、ルリカは強大な魔力をシードの肉体に叩き込んでいった。

圧倒的な力。

魔法少女はその魔力によってシードを圧殺していく。

（やれる。私……やれてる。ママ！ 私——勝てるよ！ シードに……悪魔の種に私……勝てるんだ！）

最悪の事態が脳裏をよぎる。

まさか……このまま……。本当に？

「やめて……。イヤ……。それだけは……。お願い……。それだけは許して……。しないで……
 ……お願いだから。やめて……。やだ……。やだ……。やだああああ」

恵令奈の為に耐える——そんな決意があつさりと融解してしまう。あんな大きくて、醜悪なもの自分の大事な部分に密着している。その現実だけで血の気が引いていく。泣きじゃくる子供みたいな悲鳴を上げ、行為の中断を訴えた。

だが——。

「ゴオオオ！」

獣は嬉しそうに唸ると共に、容赦なく腰を突き出す。

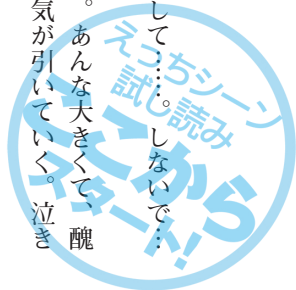
ミリッ！ ミリミリミリッ！！

「ふっぎっ！ ぎひいいいっ！」

巨棒が膣口を押し開く。異物によつて無理矢理身体の中に穴を開けられていくかのような感覚が、ルリカカの肉体を襲った。

「いっや！ だつめ！ ああああ……だつめえええええ！ やっだ！ いやあああ！」

化け物に純潔を奪われる——何時か大切な人にあげようと思っていた大事な部分を犯されていく。悲鳴を上げずにはいられない状況だった。



「挿入って来る。んつき……ひぎいい！ 膣中——わたしの膣中に……挿入って……挿入ってくるのお！ んつき……ふぎいいい！ 駄目……挿入れないで！ 挿入れないでえ!! 許して……やめでえ！」

広がる異物感——必死に悲鳴を上げて、行為の中止を訴える。

「ああ……凄くいい声だわ。堪らないわあ」

けれどもどれだけ痛々しい悲鳴を上げたところで、先生は容赦などしてはくれない。それどころか、より楽しげに笑う。

「やめて……頼む先生。やめてくれ。ルリカにこれ以上酷いことをしないで……。頼む。お願いだから先生……」

「やめて？ 何を言ってるのよ峰藤さん。こんな楽しいイベントやめられるはずないでしょ。ほら、峰藤さんも一緒に見ましようよ。日番谷さんが女の子から女になる瞬間をね」そんな先生に恵令奈がポロポロ涙を零しながら許しを請うのだが、まるで聞く耳を持つてはくれなかった。

ミヂッ！ ミヂミヂミヂイッ！

「ふつき……ひぎいいいい！ 痛い。こつれ……痛いいいいい！ 壊れる。こんなの……ほ、ホントに私が壊れちゃう！ やめて！ もう……こつれ以上……い、挿入れちゃ駄目えええ！」

膣壁が無理矢理拡張されていく。巨大な杭を穿たれる様な感覚に息がつかまる。秘部を中に身体が二つに引き裂かれてしまうのではないかと思うほどだった。

このままペニスによって挿し殺されてしまうのではないかとすら思える。

「もうむつり……挿入らない！　こ……これ以上挿入らないから——ゆつるして……お願い……ゆるじでえええ!!」

死にたくなかった。怖い。怖い怖い怖い——だから悲鳴を上げる。許しを請う。

だが、悲鳴を上げれば上げるほど、シードは興奮を覚えているのか膣中に挿入したペニスをより硬く、太く、屹立たせてきた。

膣壁がより大きく広げられる。内臓が押し潰されてしまうのではないかと思うくらいの圧迫感を覚えた。

「壊れる。ほ……ほんつとに……ぐっひ……ふぎいいいい……。わった……わたつしが、壊れる。こわつれ、ちゃうから……。やめで……もう！　挿入れないでえ」

ポロポロと眈からは涙を零しながら、救いを求めるルリカだったのだが——。

「ゴオオオオッ!!」

ブヂ！　ブヂブヂ……ブヂイイイッ!!

シードの腰がこれまでに以上に激しく、強く、膣奥にまで撃ち込まれた。

「ひぎっ！　んぎいいいいいい!!」

身体の中の何か引き裂かれていくような音が確かに耳に届く。胎内の大切な部分を引き裂かれるような痛みが、全身に走った。

瞳孔が開いているのではないかと思うほどに瞳が見開かれる。結合部からはツツツと一筋の血が流れ落ちていった。

「あああ……。痛い。こつれ……。いだい……。いだいのおおお！ はいつでる。奥まで……。わだちの奥まで硬くて……。お……。大きいのが挿入ってるう！ ふつき……。んぎいいい」

肉槍が膣奥までを刺し貫く。ズンツと肉先が子宮口に触れているのが分かった。犯された。醜い化け物に処女を奪われた——身体だけでなく心の中までも肉槍で陵辱されてるような気さえしてしまう。

「うふふ……。おめでとう日番谷さん。どう？ 女になった感想は？ 嬉しい？」

パチパチと先生が嬉しそうに拍手してきた。

「う……。嬉しくなんか無い。こんんな……。はあはあ……。こんなの……。うれし、くなんか……。あ、ありません。痛い……。痛いです。こんなの……。痛いだけだから抜いて……。もう許して下さい。お願いです。先生……」

ドクンツドクンツと肉棒が膣中で脈打っているのが分かる。膣壁越しにその律動を感じているだけでも、悲鳴を上げたくなくなるくらい痛みをルリカは覚えてしまっていた。

「裂ける……。裂けちゃう……。わった……。わったひの身体がさげちゃうよお。おつおつ

おほおおお！ ゆるじで……ぜんぜい！ もうゆるじでええ」

「許してあげてよ先生。頼むから……もう、これで終わりにしてくれよ！ 先生だって魔法少女なんだろう？ だったら……こんなことするなよ！ 頼む。頼むから!! あたしが代わりになるから……。だからルリカだけは助けてあげてくれよ……」

ルリカの懇願に合わせるように改めて恵令奈も願う。

「この光景を見ても自分が代わりになっていいといえるなんて……素晴らしい友情ね。その気持ち……ずっと持ち続けてね峰藤さん」

「なら！」

「けど……それとこれとは話が別なの。強い悪魔を生み出す為に重要なのは、強い魔力を持った魔法少女。貴女じゃ駄目なのよ。だから……日番谷さんの初めてのセックス——一緒に見届けてあげましょうね」

ニッコリと先生は笑った。

その笑みと連動するように——。

ずじゆるっ……。ぐじゅううっ！

「動いてる！ あつぎ……んぎいいいい！ 膣中で……私の膣中で硬くてお、おきついのが、うっご……動いてるう!!」

膣奥まで突き込まれていた肉棒が今度は引き抜かれ始めた。

膨れ上がったカリ首によって、腔壁がゴリゴリと擦り上げられていく。まるで内臓そのものを外側に引き摺り出されていくような感覚だった。

「いっや……うご……動かないで！ 駄目！ 駄目えええ！」

悲痛な悲鳴が響く。

だが、どんな悲鳴も、どんな言葉もシードには届かない。

「ゴアアアアア!!」

動きを止めるどころか、上がる悲鳴に歓喜するような咆哮を上げると、腔口辺りまで引き抜いていた肉槍を、ドジュウツと再び腔奥にまで叩き込んできた。

「んひいっ!!」

子宮口を肉先でズンツと叩かれた瞬間、視界に火花が飛ぶ。

「あっひ……ま……まった……あああ……。また奥まで……きった……あつぎ……ひっひっひんんんん」

電流でも流されたみたいに、床に上半身を密着させた肢体が震える。強すぎる刺激に意識が飛んでしまいそうだった。

ぐっじゅ……ずじゅぼっ！ どじゅうっ！

「あつぎ……うっそ?! あううう……まだ……まだ動くの?! まだああああ!」

突き込みだけでシードは満足してはくれない。一突きだけでは足りぬとばかりに、再び

腰を引き抜いていく。

「引っ張られる。あそこ……私の膣中が引っ張られでぐう！ ひっひっひいひい！」
再びカリ首よつて肉ピラの一枚一枚が外側に捲られていった。

「むっり……あぐうう……。むっりですうう！ 死ぬ。ふぎっ！ んぎいひい！ 死んじやう！ こんなわつたし……死んじやいますう」

「死ぬ？ 大丈夫よ日番谷さん。人間この程度で死んだりはしないからね♪ 第一、この程度で死ぬ死ぬいつてたらこの先もたないわよ。だって本番はここからなんですから」

「ほんっ……ばん!!」

一体先生は何を言っているのだろうか、脳裏に疑問を抱いた次の刹那——。

どっじゅ！ じゅばんっじゅばんっじゅばんっじゅばんっじゅばんっじゅばんっ！

「あぎいっ！ ひっぎ！ ひっひっひっひっ——ふぎいひいひい!!」

シードが腰を振る速度を上げてくる。ルリカの肉壺を刺し貫かんばかりの勢いで、激しく腰を叩き付けてきた。

下腹部から脳天まで衝撃が突き抜けていく。まるで壊れかけのテレビのように、ピストンのたびに視界が激しく明滅した。

肢体が何度も前後に揺さぶられる。腰と腰がぶつかり合い、パンパンパンツという音が周囲に響き渡った。

「はっげし……はげっじぎる！ あうっあうっあうあああ！ こっわれる！ わだひの！ あああ！ わっだひのあそこが壊れちゃううう！ ぐちゃぐちゃ……ぐっちゃぐちゃになる！ ひっひっひんんん！ わっだひの……わだひのなつがぐちゃぐちゃになっちゃうのおお!! 死ぬ！ 死ぬううう！」

肉槍によって内臓を押し潰され、本当に死んでしまうのではないかとさえ思ってしまう。「ゆるじで！ もっう……やめで！ やべでえええ！」

だからこれ以上はやめてくれと何度も訴えるのだが、声を上げれば上げるほど、シードによる突き込みは激しさを増していった。

しかも、ただ膣中を肉莖で擦り上げてくるだけでは終わらない。

「なっに!! あうあつ！ ぐひひひひ！ お……おおきくなつでる！ ながで……ふっぎ……んぎいいい！ おつき……おつきぐなつでるのお！」

肉壺を犯す肉槍が、一突きごとに肥大化していく。胴回りが一回りも二回りも大きくなり、ただでさえ苦しいほどに押し広げられていた膣道をより拡張してくる。肉先は破裂してしまふのではないかと思うほどに不気味に膨れ上がり、これまで以上に子宮口を圧迫してきた。

「凄い！ 本当に大きくなつてる♪ あはっ！ そんなに大きくなるくらい、日番谷さんのま○こって気持ちがいいんだ」

先生がパチパチ手を叩いて喜ぶ。

実際はたから見てもはつきりと分かるくらいに、肉槍は膨張していた。

膣口がいまにも裂けてしまうのではないかと思うほどに押し広げられる。破瓜の血を垂れ流しながら押し広げられる肉壺——誰の目から見ても痛々しい光景だった。

だが、だからといってシードはグラインド速度を落としてはくれない。それどころか、肉棒が大きくなればなるほどピストンの勢いは増し、より奥にまで肉槍を突き込んだ。

「あつたる！ おつく——おぐにあだるう！ ひっひっひっひっひんん！ だつめ……もう……やつべで……ほんどに……ほんつどにじんじやう！ あああ！ じんじやうがらやべでええ！ ふぎつふぎつ——んぎいいいい！」

玩具のようにガクガクと肢体が揺らされる。呼吸すら阻害されるほど激しい動き——何とかこの状況から逃れようと、腕を伸ばし、床をかくのだが、押し掛かるシードの巨体から逃れることなどできなかつた。

それどころか、抵抗すればするほど、怪物はルリカを逃がすまいとするように、より肉槍を膣奥にまで突き込んでくる。

「あつぐ……震えてる。なつかで……私の膣中で硬いのが震えつでるう！ あつぎ……ふぎつふぎつむぎいいいい！ なにこれ……ビクビクしでる！ おちんちんがびぐびぐじでるのお」

やがては膛中で肉槍が痙攣するように震え始めた。

「うふふ……。そろそろみたいね」

「そ……。そろそろ？ 何が……。なっ！が、そろそろなんでじゅがあ!!」

「何ってももちろん射精よ」

「しゃ……。しゃぜい!？」

状況が状況だけあつて、一瞬言葉の意味が理解できなかつたのだが――。

「や……。いやっ！ だつめ！ それは！ ぞれだけは駄目えええっ!!」

すぐに現実を理解する。

射精という言葉が持つ意味を認識してしまふ。

「出さないで！ それは……。ぞつれだけはゆるんで！ お願い！ お願いでしゅ先生！

なんでも……。他のこつとなら……。あつぐ……。ふぎいい！ ひっひっひんん！ なん、で

……。も、しましゅから！ やめさせて！ あぐううう！ 膛中に……。なっかだけはやめざ

ぜでえ」

ズンズンズンツツという突き込みを受けながら、請い願う。助けてくれと先生に叫ぶ。

「頼む先生。お願い……。頼むよ。頼むから……。ルリカを……。ルリカをこれ以上酷い目に

遭わさないでくれ。お願い……。お願いだよ先生」

ルリカだけでなく恵令奈も頼み込む。

「だくめ♪ そんな願いは聞き入れられませ〜ん。悪魔を産む為には膣中射精し必須なのだ・か・ら……諦めてね♪」

どこまでも無慈悲だった。

冷酷な言葉をニコニコ笑顔で向けてくる。

「ワオオオオオオンンンンッ!!」

その笑みに後押しされるようにシードは咆哮を上げながら、繰り返し繰り返し肉槍を膣奥に叩き付けてきた。

「ふっぎ！ いぎいいっ！ ひっひっひっひっひっひっひっおおおお！」

抵抗する術など存在しない。されるがままに犯される。何度も何度も膣奥まで穿たれる肉棒。ズンズンズンッと子宮口が抉られる。蠢くたびに剛直はより硬くたぎり、醜悪な亀頭は更に大きく膨れ上がっていた。

肉茎が膣壁に押しつけられる。はつきりとペニスの形を——肉胴に浮かび上がる血管の一本一本まで認識することができてしまう程だった。

グラインドにあわせてペニスの律動がより大きなものに変わっていく。射精が近い——身体に牡を迎え入れることは初めてだけれど、はつきりとそれを理解することができてしまった。

「出さないで！ おねがっい！ 膣中が……あっあっあっあっあっ——なっかだけはやめ

れ……すぐくあづいいい！ 火傷……火傷しちゃう！ 膣中が……私のなっかが熱い汁でやげぢやうのお！ ぐっひ——んひんんんん!!」

下腹部に広がる熱気。肉棒の律動にあわせてルリカはのたうち回った。

「止まらない！ 止まらないのお！ んひん！ ひっひっひっひっ……ふっひいいい！ まだ……まだ出てる！ あああ……まつだ流れ込んでぐるう！ お腹……あああ……わっだひのおながたぷたぷになっひやうのお」

尋常な射精量ではない。子宮はすぐにいっぱいになるほどに満たされ、膣道にまで肉汁は溢れ出てきた。その膣道すら一瞬で肉汁塗れとなり——。

ぶびゅばっ！ びゅばああっ！

「ふひんっ！ あっひ——ふぎいいい！」

遂には結合部から失禁でもしているかのように、外側に吹き出した。

膣口から漏れ出した肉汁が、太股を伝って垂れ流れ落ちていく。

「うふふ……あああ……。堪らないわあ」

この淫靡すぎる光景に、先生は熱い吐息を漏らし、恵令奈は口惜しそうに奥歯を噛み締めた。

「あっふ……あふあああ……あっあっあっ……」

全身から力が抜けていく。

射精が終わった頃には、ルリカは身動き一つとれなくなってしまうていた。

ぐったりとしながらはあはあと肩で息をし、時折思い出したかのように肢体を震わせる。人々を守る魔法少女のものとは思えない程に、無様な姿だった。

「うふふ……。どうだったかしら日番谷さん。初めてのセックスは気持ちよかった？ たつぷり膣中射精しされる気分はどう？ 幸せかしら？」

うふふつと先生が笑う。

どこまでも穏やかな口調——けれど、どんな言葉よりも冷たく聞こえた。

「き……。気持ちよくなんか……。はあつはあつはあつ……。あり……。まあ、せん……。幸せなはずない……。こんなの痛くて……。つ、らい……。だけです……」

ぐったりとしながらも先生を睨む。

「あらそう……。それは残念だわ。だけど安心して……。本番はここからだから。すぐに気持ちよくなれるわよ」

「——え？」

本番はここから？

先生の言葉に一瞬思考が飛んだ。

「ほ……。本番って……。どういいうい、意味なんですか？」

なんだか身体が震えてくる。自分から問いかけておいてなんだが、正直答えを聞きたく

はなかった。

「どうってもちろん……まだまだその子はやる気満々っていうことよ」

だが答えは返ってくる。

そして、その答えは最悪なものだった。

同時に――

「あっ!? なに? なにこつれ? 嘘――大きく。お……おきくなってる。おちんちん……ふぎいつ……あつふ……くはあああ……おちんち、んの根元がふ……膨らんでる!!」

射精を終えてもなお挿入されたままだった肉棒の根元の部分が球形に膨れ上がり、膣口を塞ぐ。

「な……何なのこれ!? なんなんですかこれはあ!!」

「何って……もちろん、ちんぽが抜けないようにする為の機能よ。ああ、流し込んだ精液が溢れ出ないようにする為っていう意味もあつたわね」

「抜けないようにするってどういうことだよ!? もう終わったんじゃないのかよ!」
にやつく先生に恵令奈が鋭い言葉を向けた。

「先生に対して言葉遣いが悪いわよ峰藤さん」

「うるせえ! そんなことより、何が起きてるのか教えろ! ルリカを解放しろ!」

「怖い怖い……。まあでも疑問はもつともだから教えてあげる。いい、あのシードはね、

一回射精したくらいで終わらないの。確実に相手が妊娠するまで、何度も何度も——だいたい一晩かけて牝に種付けをするのよ」

「ひ……一晩!？」

血の気が引いた。

「だからね、日番谷さんを解放することはできない。ふふ……さあ峰藤さん。一緒に日番谷さんが妊娠する様を見ましようね♪」

「や……やだ……。やめて……。先生。やめて下さい。も……もう無理です。これ以上なんて無理。死ぬ……。ほ……。本当に死んじゃいます」

「大丈夫よ日番谷さん。痛いのはここまでだから。ここから先は快楽というものを味わうことができるから。だからね……怖がらなくていいのよ♪」

先生に言葉は通じない。

最早別の生き物のようにさえ感じられた。

「快楽って……そんな……こんなことで私は……き、気持ちよくなんなら——」
ずっじゅっ! どじゅううっ!

「はひひひひひ!!」

言葉の途中であってもシードは氣になどしてくれない。突き込まれたままの腰が再び動き出した。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>